

方向

第九六号 一九八九年四月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

蛇

尾

— ジャータカへの一考察 —

1989. 3.

柴野純孝

一、 寓話的説話

蛇頭と蛇尾とのけんか 釈尊の本生譚と云われているジャータカについては全くの素人で、ただよく引用紹介される一、二の説話を、それも漠然と知っているにすぎない。そのわずかにしか知っていない説話の一つが、例の「蛇頭と蛇尾とのけんか」のくだりであって広く人口に膾炙しているものである。即ち全体のトッピーダーを以て任じている頭が一見鈍重そのものの尾に向って「お前はいつも他人の荷厄介にばかりなっている全くの能無しだ」と悪口雑言をいうのであるが、それを聞いて腹にすえかねた蛇尾は「俺はいつも我慢をこらえてお前の云う通りに動いているのだ。これからはお前の云う事など聞いてやるものか」というや否や側の木の幹に巻きついて「さあここで俺は一服する。お前は勝手にしやがれ」と云い返したのだが、動きがとれなくなって、さすがの横柄な頭も己の非を認めて蛇尾に謝った、という筋書である。

この話を聞いて判官びいきに喝采する人もあろうし、又色んな寓意を詮索する人もあるかも知れないが、今ここに取り上げようとするのは、秘められた寓意ではなくて、けんかそのものの構図の面白さである。一体、蛇の

頭と尾とがけんかをすると云う事は現実にありうる事であろうか。してみれば、この物語の背景には、人間と蛇との密接な生活が営まれる風土と印度人の抜群の空想力とが考えられるのである。

所で注意すべき事は、この物語の空想的な場面の中で現実的に起こりうるのは蛇尾の木の幹に巻きつく所だけだと云う事である。一体蛇尾とはどんな代物であろうか、又尾とは如何なる物であろうか、少し考えてみたい。一般的な尾に対するイメージ およそ大抵の動物は、頭、首、胴、の四つの部分からできており、胴には手足がついているのが普通である。そしてこれら四つの部分は夫々の存在理由を持っているのであるが、中でも重要なものは頭と胴である。

頭は全身に対する情報伝達の総指令部であり、胴は生存のためのエネルギーの生産工場であって、この二つの再重要所を連結する所が首という訳であろう。故に首なる物は生命保持の点からは、頭や胴に劣らぬ急所と云いえよう。また手足はある意味で、頭、胴の補助機関とみなす事ができるが、ところでそれらの物と比べて尾という物は一体何であろうか。鳥や魚の場合は別として、一般に尾なるものは体からはみ出た物、いわば単なる付加物、アクセサリにすぎないように見えるのではあるまいか。尤も多少方向の舵とりや蠅等を追っ払う事はしているが、影のうすいものと云わざるをえない。

ただ立派な尾を持っているのは爬虫類であって、鱗から尾を取ったら極めて不様な物であるに違いない。しかし蛇もまた爬虫類の一種である。そんな事を念頭におきながら、今いわゆる蛇尾なる物を考察してみようと思う。蛇尾の形相について、もし蛇にも鱗のような足があれば、それから後の部分が尾である事ははっきり分かるので

あるが、蛇には足がないので、どこまでが胴でどこからが尾になるのか分からない。一見、胴が段々細くなり末端近くの貧相になった所だと思ふ位であろう。従つて鱗の尾のようなイメージが出にくいのである。そう云う訳で蛇尾と云えば見覚えがなく、くだらない物として龍頭蛇尾なる語もでてきたのであろうか。それにしても龍なるものは蛇をもとにして神変万化させたものに違ひないのであるが、それでも胴だけはもとのままになっている。そして龍尾なる物を目立たせるために鱗をつけ足をつけたして恰好よく仕上げている。龍と云う物の出現で損をしたは蛇であるが、その最たる物は何といつても蛇尾であつて、遂につまらない物の代名詞となつてしまつた。

実際、夏の暑い日盛りに、のろのろ進む蛇の姿を見ていると、頭や胴にとつて尾というものが相当なお荷物になつていふと思えない事もない。それでも蛇の胴自体は自分のすぐ後に来る尾を兄弟位に思ふかも知れないが、頭にとつては正に齒がゆいよそ物にうつるであらう。間に胴と云う仲介者がいるが、頭と尾とは赤の他人に近く、あのジャータカの説話の構成もこんな事を根拠としてできたものではなからうか。

所で先述したようにこの物語の中で唯一の現実でありうる場面は、尾が木の幹に巻きつく所であつたが、実際にそんな姿を見た事のない我々にはピンとこない所がある。しかし、この点を見逃すとこの説話の妙味は半減するであらう。初めてこの物語を読んだ時以来少々不審な感があったが、あらためて目のうろこが落ちる思いをさせられたのは印度洋の孤島から命からがら帰つてきた一兵卒の話を聞いた時であつた。

初めに 断っておきたいのは、今では違ひ昔の事なので、その島の名前、当時の年月日、部隊名は不明のままであるが、兵科は通信であった。他と隔絶した印度洋の孤島にわざわざ通信隊が派遣されたのは、当時のビルマの戦況が悪化していたので、シンガポールを中心とする地域を西方からの圧迫に対して守るためになされたのであろう。

大蛇の襲撃 その島へ兵隊達がやって来たのは多分昭和十八年末か、十九年の初め頃だったと思われる。それから戦局が悪化するにつれて、その島へも輸送が次第に絶えがちとなり、遂に完全に孤立してしまつたのであつた。そんな時すぐ問題になるのは云うまでもなく食料の事である。この島は可成り大きい島であつたが、全島密林に覆われていて、太古以来、人間を寄せつけない島であつたらしい。従つて食料として目ぼしい物の有り様がないのであつた。この島で兵隊達が見かけた唯一の動物は、あの見るも無気味な大蛇の姿であつた。その大蛇に今や餓鬼のようになった兵隊達が目をつけ始めたのであるが、何しろ相手は一人や二人の手におえる物ではない。この島に近づく事がタブーとされたのも、そんな大蛇が無数にいた故であらう。

大蛇狩り 食うために生きるのか、生きるために食うのか。衆議一致して、愈々大蛇狩りを決行する事になった。だが何しろあのスサノオの命以来の事であるから経験者もおらず、予想もしなかつた事である。いわんや大蛇に於いてをやである。また貴重なる弾丸を大蛇にばかり使うこともできない。それでは近接戦はどうであるか。

いかに百戦錬磨の勇士でも、らんらんたる目で大蛇ににらまれては尻ごみせざるを得ない。どのようにして近づいていくか。どのようにして戦果をあげるか。仲々妙手が無い。そんな時、幸いにも同行していた現地人が次

のようなアドバイスをしてくれたのであった。

「密林に潜んでいる大蛇は外からの闖入者をかぎつけると直に臨戦態勢、即ち攻守両面の理想的態勢とぐるを巻き始める。それから鎌首をもたげて闖入者の方向に注意怠りなく、やがて敵が、ある距離まで近づくと、とつさに尾が飛んで、狙い打ちに相手に痛打を与え、間髪を入れず、それを巻き始め、次第にしめ上げて息の根を止め、背骨等を細々にくだいてしまふのであつて、一番こわいのは頭でなくあの尻尾だ。あいつには虎やライオンでも叶わないのだ」

この様にして、現地人から色々アドバイスを受け、やがて準備万端を整えた兵士達は愈々大蛇狩の実行にとりかかった。先ず一番の道具は長い竹竿であつて、十数米もあるその大竹を数人で根本の方を抱え、穂先を前にして密林の中を進んで行った。間もなく、果してとぐるを巻いている大蛇にぶつかった。竹が長いので尾が飛んで来ても、一応大丈夫と思われたが、それでも近づくにつれて大きな口をあけて、舌をべろべろと出しながら、らんらんと睨みつける大蛇の顔からは一時も眼をはなせなくなつた。かくして竿の先が蛇から数米位に近づいた時、突如、それこそそれこそ電光石火に竹竿をめぐらして尾が飛んで来て竿に烈しい一打を加えた。数人で支えていたのであるが、次いでぐるぐる巻かれ始めると大蛇の重みで不覚にも落としてしまふのであつた。思わず実を引こうとした時、例の現地人が「今だ、大蛇をやつつけるのは今だ」と大声で叫んだ。その声に氣を取り直して、見れば大蛇は竹に巻きついたまま、死んだ様にじっとしている。渾身の力を一瞬に使い果たしたので呆然としていたのだ。だが、ぐずぐずしているとすぐ回復してくるだろう。今だと兵隊はてんでに銃剣をふるって忽ち大蛇の

首を打ち落としてしまったのであった。

そしてこれが大蛇の楽園の崩壊の初めとなつて、この後一年余りたつて戦争が終る頃、さしも沢山いた大蛇の姿がすっかり島から消えてしまったと云う事である。誠にすさまじい話であるが、大蛇のお蔭で兵隊達は危ない命を無事永らえて祖国へ帰る事ができた。

蛇尾の再考案 実際に毎日大蛇と戦つた人の話を聞いて、あらためて蛇尾なる物の威力を痛感させられたので、象の場合と比べてみようと思う。

象は敵に対して、あの長い鼻で強打を与え、次いで倒れた相手を足で踏みつぶすのであるが、大蛇の尾は、その二つの働きを一つでやつてのけるのであつて、正に摩訶不思議な力を持っていると云わざるをえない。ジャータカの話も何かそんな事を示唆している様である。

小 野 田 原 田 慶

一九九三・二五

原 田 慶

二月末のころ、昼過ぎに奈良県に住む長男が突然にあらわれて、ドライブにつれていってやろうという。それでは醍醐へでもいってみようかという相談になつて、わたしたちふたりは車にのつた。

バスや電車を乗り継いでいると、とても半日でいってこられるコースではない。千本通りを南へ、丸太町を東へ、堀川通りを南へ、さらに五条通りを東へとジグザグに走りぬけて五条のバイパスを通過して山科へでる。いつ

も大きなバスに乗っているの、たまに自家用車にのるとトラックやバスがとても大きくて、はじき飛ばされそうだし、からだのすぐそばで他の車が走るようにみえるのでひやひやする。

三十分ほどで山科へだが、どの道をゆけばよいのかわからない。自動車の流れをのがれるためにすこし横道にはいって、父親と息子が地図をひろげる。以前の山科は、見わたすかぎり田畑がつづいて遠くまで見とおすことができた。いまではすっかり建てこんでしまって道もよくわからず、どこへ向かっているのか見さだめにくい。標識に注意しながら方角だけをかながえて走ってゆく。止まっただずねようとしても道に余裕がなくて止められない。それでも走っているうちにすこしずつ様子がわかってきたらしい。勸修寺の案内がみえた。道筋だから寄ってゆこうということで、参道にはいった。

勸 修 寺

白壁の築地にそって参道をすすみ、門前に駐車できるようになっている。自動車道路からはずれると、このあたりはほんとうに静かなところである。門をはいると境内がひろくて、ずっとむこう正面に本堂の玄関がみえる。なにもないからんとした広場である。ご本尊は寺の創建にかかわりのある醍醐天皇の等身大千手観音像だそうである。いっばんには内部の拝観はゆるさされていないようであった。正面左手の門をはいって庭園だけがあることが出来る。

勸修寺は「かじゅうじ」「かじゅじ」「かんじゅじ」などとふりがなされているのを見るが、京都市のつくつ

た立札には「かじゅうじ」とよませている。それによれば、

龜甲山と号する真言宗山階派の大本山である。寺伝によれば、昌泰三年（九〇〇）醍醐天皇が生母藤原胤子の御願により創建したと伝え、寺名は、天皇の祖父にあたる藤原高藤の諡号をとって名付けられた。

本堂は、江戸時代に靈元天皇より仮内侍所を、書院と宸殿は、明正天皇より旧殿を賜って造られたといわれる。庭園は池泉回遊式庭園で、夏には、池の水蓮が美しい花を咲かせる。

とある。創建当時の建物はほとんど応仁の乱にあつて焼失したようである。藤原高藤は冬嗣の孫で勸修寺内大臣とよばれたひと、昌泰三年になくなつている。わたしは市バスの行きさき表示で勸修寺というのをみて、いちど行ってみたいとおもつていた。この寺のあたり、地名も京都市山科区勸修寺町である。

高藤と勸修寺のかかわりについては『今昔物語』（巻二十二高藤の内大臣の語第七）にでてゐる。

高藤が秋のすえに山科へ鷹狩りのあそびにいった。にわかにも雨がふり雷もなつたので、そのあたりの邸の門に雨やどりをしたが、雨はやまず、ますますひどくなるので、邸の主人の勧めにしたがい泊まつた。十三、四歳の娘がいて夕食などを運んできた。うつくしい娘だったので契りをむすんで、翌朝、腰の太刀をのこして帰つた。そのうち、父の良行に鷹狩りにでることを禁止されたので、山科へゆけず、六年ほどしてから、恋しくおもつて訪ねてみると、六歳くらいのうつくしい女の子がいた。それが自分の子だということもわかり、母子ともに京につれかえり、のち、男の子もふたりうまれた。それは、藤原定国と定方だそうである。そして六歳くらいのうつくしい女の子だったひとが、宇多天皇の女御となつて、醍醐天皇をうんだ藤原胤子である。高藤が雨やどりした

邸はそのあたりの大領、宮道^{みやみち}弥益^{やえき}のもので、勤修寺は、弥益の邸あとを寺にしたものであるという。胤子が醍醐天皇の寿福をいのり、弟の定方が建立したともいわれているが、いずれにしても、天皇、高藤、宮道三家にかかわる寺だということのようである。

庭園への門をはいると、すぐ右にひろい芝生がひらけ、そのむこうに宸殿が格子戸をびたりと閉じていて、黒い格子と白い紙の色がうつくしい。人かげはなく、平安朝のひとがなかにもおかしくないほど、さわやかな気配であった。

書院のほうへまわってゆくと、そのまえの庭に樹齡七百五十年といわれる偃白^{えいびやく}榎^{えん}が、庭をうずめるようにひろがっている。これはヒノキ科の植物であるが、上にのびるのではなく、枝を地にはわせてひろがるのであるらしい。その枝のしげみに沈みそうにして、水戸光圀が寄進したという勤修寺形燈籠があり、川にかぶ屋形船をおもいださせるような粋なものである。

ほかに、江戸時代に京都御所からうつされたという臥龍^{がりりゅう}の老梅、紀州の銘石で造られたという半月の水盆などが、書院のぬれ縁のすぐちかくにあった。梅は、親はかれて根ばかり、子もかれて孫の下になり、孫が花咲いているという、三代の老梅である。

書院の庭をぬけて南がわへでると、ひろびろとした池庭である。まわりはしげった木々にとりまかれ、池の北がわだけが芝生になっていて、その西のかどに観音堂が建っている。まわりの山も借景としてとりいれられ、あまり造りすぎもせず、ほどほどにひとの手のゆきとどいた暖かさ、おおらかさが心地よい庭である。この氷室の

池は、平安時代には、毎年一月二日に池にはった氷を宮中に献上し、氷の厚さによって、その年の五穀の豊凶をうらなつたといわれ、京都でも指おりの古池になっている。池のなかにいくつかの島があり、どれもちいさいが、集仙島しゅうせんとうには池の主である白蛇が住むという伝説があり、自然のままに樹木がしげっていた。東には茶室もあって、池で船遊びをしたかもしれない、平安朝をしのばせる庭であった。

勸修寺には、第十九代に後伏見天皇の皇子寛胤法親王が入り、門跡寺院になり、山階晃親王のひまごの筑波常遍師がおられる。ちかごろの新聞に師の、

「花はその寺の性格を表す」これは師匠の言葉ですが、その通りだと思えますね。醍醐寺は桜が有名です。

随心院なら紅梅。勸修寺はなにかといえはスイレンです。お庭のスイレンが美しいのです。ここは歴代の法親王が世間と離れてひっそりとお暮らしになったところ。仏のスイレンがよく似合うと思います。

という談話がでていた。随心院は勸修寺から歩いて也十分あまりの距離である。わたしたちはつぎに随心院へむかった。

随 心 院

勸修寺から東へ、そしてすこし南へさがったところ、山科区小野御霊町に随心院がある。

白壁の一部をあけて、なかまで車がおれるようにしたようである。はいつて正面に薬医門があるが、このうつくしい門はふつうの出入りにはつかわれない。やはり応仁の乱によって開創当時の建物は焼け、本堂は慶長四

年、桃山時代の建築、薬医門、玄關、書院は寛永年間、奥書院は徳川初期、能の間は宝暦年間、総門、庫裏は宝暦三年、それぞれに九条家や二条家から移築されたという。これも門跡寺院である。

ひろい境内に車をとめると、ちょうどそこに小野梅園という一面もあり、あらい砂のしかれた境内は明るくすがすがしい。まっすぐ外をみると大きなマンションが建っていて遠くの景色がみはらせないのは、いかにも残念である。

梅はまだ咲いていなかったが、三週間ほどのちの三月十三日の新聞で、

遅咲きの梅で知られる山科区小野、随心院の梅はちようと今が見頃、小野梅園には八重、しだれなど五種類の梅、約百三十本が植えられ、芳香を漂わせながら、紅、白、薄ピンクの花がそれぞれ妍を競っている。という記事を見た。

わたしたちは通用門からはいって庫裏に上がり拝観する。がらんと大きな土間に履物をぬいであがったところに、簡単な説明や、新聞の切り抜きの古いものなどが掲示してある。その奥のへやは休憩室で、院内の様子をビデオで見、説明が聞けるようになっていいる。必要なひとはお金をはらってスイッチをいれるようにしてあるらしい。大玄關へわたって表書院へはいる。板戸にもあさやかに花や鳥がえがかれているのが心にのこる。このあたりは九条家の寄進で、寺というより、人の住み馴らした温かみのようなものが襖や壁にまで感じられるのがいい。庭はさっぱりとした池庭で、大きな鯉がおよいでいた。

本堂にはいると、ずらりと仏像がならんでいて驚いた。ほんとうに惜しげもなくと思うほど、一面にならんで

おられる。本尊の如意輪観音は秘仏だそうであるが、阿弥陀如来坐像、金剛薩埵坐像、不動明王立像、小野小町文張地藏尊像、卒塔婆小町坐像と、坐像がおおく、立像も高さはおなじくらいのものである。壇から五メートルほどはなれて綱がはつてあるので、お像にちかづくことはできない。ほかに人かげのないのをさいわいに、ちょっと失礼してと綱のなかにはいるうとしたら、突然ピーピーと音がして、びっくりした。光線のバリヤがはつてあるらしくて、その光りをさえぎる影があると鳴りだすのである。商店などでは中にはいるとピンポンと音がして、店のひとが「おいでやす」といって出てくる。御所の土塀のまわりにも張りめぐらされていて、うっかり近づくと、ピーピーと鳴って、女の声で注意の放送がながれる。

仏像は、はなれたところからなので、あまりくわしくは見られなかったが、バリヤにおどろいて早々に退散した。奥の書院のさいごの小部屋に、小野小町にかかわる資料があつめられている。そのなかに、深草少将百夜通いのカヤの実というのがあつた。百夜かよえば願いをかなえようという小町を信じてかよいつづけ、あとひとよという夜に病にたおれて世を去つたという深草少将のはなしがある。小町が數をかぞえるために、カヤの実に糸をおしてつないだと伝えられ、たしかにカヤの実にちいさな穴があいていた。またその実をうずめてめばえたカヤの木が、むかしは九十九本あり、いまは一本だけのこつているといわれる。しかし、九十九個の実をみんなうずめたのなら、どうしてここにまだ糸の穴のあるカヤの実がいくつもあるのだろうか。そんなことをいふほうが笑われそうな伝説である。

隨心院は、醍醐寺の開祖理源大師（真言宗小野流の祖）の五代目の仁海僧正が、平安中期の正暦二年（九二二）に

開いた寺である。僧正が、夢になくなった母が牛になっているのを見て、鳥羽のほうにたずね求め、孝養をつくしたが、まもなくその牛が死んだので、皮に金胎阿部の曼荼羅をえがき、それを本尊として牛皮山曼荼羅寺をひらいたのがはじめだといわれる。のち、五代目の増俊が曼荼羅寺の子房として隨心院をたてたそうである。勸修寺より百年ほどのちの創建ということになる。僧正の俗姓は宮道氏だった。

建物のそとにでると、境内には小町の化粧井戸や文塚がある。本堂の文張地藏尊は、小町がもらったたくさん恋文を下張りしてつくった地藏尊だとつたえられるが、本堂のうらの文塚は、千束の文をうずめたといわれるものである。化粧の井戸は、竹ばやしのなかにあつて、ひらく割った石をつみかさねたような自然の石組みの底に、澄んだ水をたたえている。石段を七つほどおりてみたが、水はやや重みを感じさせるほどにゆったりとして、静まりかえっていた。この井戸の東がわに、すこしまえまでは、深草少将の通い路というのがあり、かたわらにちいさな茶店もひらいていたらしいが、いまはもう何も無い。

隨心院と小野小町とは直接のつながりはない。小町が生存したのは、平安前期の仁明天皇のころだとも、文徳、清和朝のころだともいわれているが、曼荼羅寺よりずっとむかしのことである。小町は、小野篁の孫で小野良実の娘という伝えもあるが、これも確かではないらしい。小町の化粧井戸や墓と称するところも全国にあまたということがある。

隨心院の案内に小町のことを、「容貌秀絶にして一度笑めば百媚生じ、又和歌は巧にして懐婉女流第一の名手たり」と書いてあるが、本堂にある卒塔婆小町坐像は、元気に笑っているお婆さんである。

本堂の前に、九州の学生が能の「草子洗小町」を奉納したという額があがっていたが、小町の伝説は、能の題材にもなつて、「卒塔婆小町」はよく演じられるらしい。草子洗の小町はうつくしいが、卒塔婆小町は百年の姥である。粟豆の乾し飯をふくろにに入れて首にかけ、よごれた衣にやぶれ簀、やぶれ笠、里いもかなにか野菜をいれた籠をうでにかけている。乞食をしてあるくうち疲れて、朽ち木に腰かけてやすんでいる。高野山から来て京へゆこうとした僧がそれを見て問答するところがおもしろい。

僧 これなる乞食の腰かけたるは、まさしく卒塔婆にて候。教化して除けうずるにて候。
そこを立つて、ほかのところは休みなさいと、僧がいうが、小町はしたがわなない。

小町 これほどに文字も見えず、刻める像もなし、ただ朽ち木とこそ見えたれ。

僧 たとひ深山の朽ち木なりとも花咲きし木はかくれもなし、いはんや仏体に刻める木、などかするしのなかるべき。

それから小町は僧の答えを問いつめてゆく。

さて仏体たる謂はいかに。

行ひなせる形はいかに。

さて卒塔婆の功德はいかに。

僧も負けずに答える。

僧 心なき身なればこそ仏体をば知らざるらめ。

小町 仏体を知ればこそ卒塔婆には近づきたれ。

僧 さればなど礼をばなきて敷きたるぞ。

小町 とても臥したるこの卒塔婆、われもやすむは苦しいか。

僧 それは順縁にはづれたり。

小町 逆縁なりとも浮かむべし。

僧 提婆（釈尊のいとこ）が悪も。

小町 観音の慈悲。

僧 榮特（釈尊の弟子）が愚痴も。

小町 文殊の智慧。

と問答がつづき、

小町 げに本来一物なき時は仏も前生も隔てなし、もとより愚痴の凡夫を救はんための方便の、深き誓の願
なれば逆縁なりと浮かむべし。

ついに小町に言い負かされて、僧は三たび礼することになる。よくわからないところもあるが、小町ものの能
では、観阿弥作のこの卒塔婆小町がおもしろいと思う。

ほかに、鸚鵡小町、関寺小町、通小町があつて、それぞれに小町の歌や伝説をもとにしてつくられている。鸚
鵡小町は、老いて侘びずまいをする小町のもとへ、天皇から歌がおくられてくる。

雲のうえはありし昔に変わらねど見したまだれの内やゆかしき

返事をといわれておうむがえしに、「ぞ」の一字で返えそうという。

雲のうえはありし昔に変わらねど見したまだれの内ぞゆかしき

自分の住んでいたところの内裏こそ恋しいのであって、いまの宮廷になど関心はないということだろうか。これもいさぎよい小町である。関寺小町は、たなばた祭りの前日にたずねてきた関寺の僧と若いひとたちに、老いた小町が、さかりのころの和歌をおもいだして話している。晩年の寂しさにふと隔がさしたような和やかなひとときが感ぜられる。通小町は、深草少将がシテで小町はツレである。小町が死んでから、どくろの目にススキが生えて、夜になるとあなめあなめ（あな目痛し）といったという話しをとりいれている。少将が百夜通いのつらさをかたり、小町が僧のとむらいをうけて成仏するのを妨げようとするが、さいごに「（小町の）唯一念の悟にて、多くの罪を滅して小野の小町も少将も共に仏道なりにけり、共に仏道なりにけり」とおわっている。

小町については、『古今集』の歌以外にはほとんど確かなことはわからないが、『都名所図会』の補注に小野のことが説明されている。

東山区山科の南部、醍醐（伏見区）の北に位する一邑。『和名抄』の小野郷に当る。もとは勸修寺、西野山、栗栖野一帯をも含めて広く小野郷と称した。洛北の小野郷と同じく小野氏一族の居住地である。彼等はその一族中から美女を選んで采女として宮中に勤仕させたが、彼女らの後宮における部屋は町と呼ばれた。小野小町とは即ちこの町に住む小野氏出身の采女を称したもの。山科小野郷にはこの采女の費用をまかなう養田

があつたことから、ここが小野の宅址という伝説が生じた。
そういうことかもしれないと思われる。随心院は小町の伝説のせいか、すこし艶を感じさせて、貴族の邸のようにつくしい寺であつた。

醍醐寺

いよいよ目的の醍醐寺について驚いた。どこもかしこもきれいに掃除され、参道はすべて両脇に長方形の旗の波である。朱、紫、白、黄、緑、風にはたはたと音をたてて一メートルおきくらいに立てならべてある。醍醐寺とはなんとほでなところであるか、地獄極楽の入り口みたいな不思議なところであると思つた。京都市伏見区醍醐東大路町、随心院とはそれほど離れていないのに、ここは伏見区である。くるまから出て、旗に染め抜かれた大きな文字をみると、

奉納 醍醐山五大力尊

施主の氏名や企業名がいさく添えられている。偶然のことであるが、あすが五大力さんのお祭り、その準備にたくさんのひとが掃除や飾りつけをしているのである。ちかくの高校生もつだっている。杉の枝で門柱をつくっているひともある。

ただしくは五大力尊仁王会、毎年二月二十三日に営まれる。五大堂にまつられている五大明王の功德をたたえ、国家の安泰と万民の豊稔をいのるものだそうである。わたしたちが知らないところで、だれかがいつもみんなの

ために祈っているということは、忘れてはならないことだとおもう。五大明王とは、不動明王、降三世夜叉明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王である。毎年テレビや新聞で、この祭りの力くらべが報道されるので、五大力さんというのはよく知られている。大きな鏡餅をもちあげる競争で、力自慢の学生相撲なども参加するようである。

おおぜいのひとが働いているあいだを通って、下醍醐の代表的な建物のひとつ、三宝院を拜観する。醍醐寺は、弘法大師の孫弟子にあたる聖法理源大師が、貞観十六年(八四六)、十八年ともいわれるが、宇治郡笠取山の靈地に草庵をむすび、准胝、如意輪の両観音像を彫刻し、堂に安置した。これが真言宗醍醐寺のはじまりである。開創後、醍醐、朱雀、村上の三帝のふかい帰依によって、しだいに堂塔が建立され、天曆五年(五五三)に五重大塔ができ、山上山下の大伽藍が完成したという。上醍醐、下醍醐とよばれて、たいへんに広大な寺域をもっている。この寺を醍醐と名づけたのは、聖宝が靈地をえようとして、十七日のあいだ祈ったところ、山のうえに五色の雲がかかったので、のぼってみると、ひとりの老人がきて、そこにあつた泉をほめたたえ、これこそ醍醐味なりといつて与え「われはこれ地主の神、横尾明神なり、ながくこの地を尊師にたてまつるべし。はやく精舎を営みて、ひろく仏法をひろめ、群類を利したまはば、擁護せん」といって見えなくなった、という伝えによる。聖宝は氣宇雄大で、全国の名山靈地を遍歴し、とくに大和の金峰山が役の行者ののち、ひさしく道もないありきまであったのを開発したということで、修験道(山伏)の大峰入りが聖宝によって起こされた。このひとは延喜九年(九〇七)になくなっている。

三宝院は永久三年(二二五)に建立され、門跡寺院として醍醐は隆盛をきわめたが、三百五十年ほどのちの応仁の乱にあつて、下醍醐は五重の塔をのこしてほとんど焼けてしまった。げんさいの三宝院は、豊臣秀吉が慶長三年(一五九八)に醍醐の花見をもよおすために改築したものである。

玄関から靴をぬいであがる。ここは勸修寺や随心院のしずかさとはちがつて、拝観のひとが列をなし、奉仕にきているらしい同じような服装のひとが説明したり、撮影禁止の注意をしたり、廊下を雑巾がけしたりしている。太閤さんの庭園はさすがにりっぱであつた。ひろい池に板や、土や、石の橋がかかり、島の松には竹であんだ支えをして形をととのえている。つかつてある岩石がおおく、どれも銘石らしい。とくに池の対岸の築山のすそにあるおおきな石は、この庭の守護石で、藤戸石といい、聚楽第からうつされた当時の勳者を象徴するものだそうである。両脇にひくい石があり、弥陀来迎をあらわそうとすれば、うしろの築山が須弥山にみたてられる、と説明している。書院は上、中、下段の間の三つにわかれていて、三の間はいちだん低くなつており、畳をとると鏡板がはつてあるため、揚げ舞台の間とよばれる。

渡り廊下から階段をあがると弥勒堂とよばれる護摩堂である。弥勒菩薩と両脇に弘法大師、理源大師の像が安置されている。この庭は、砂のうえに杉苔で瓢箪と盃がえがきだされていて、写真でみたことがあるので、やつとなつかしい人にめぐりあつたような気がした。

秀吉は三月十五日に花見の宴をもよおし、四月七日にこの書院の庭つくりにとりかかり、その十二日にも三宝院をおとずれるという気のいれようであつたが、五月に発病、八月十六日になくなつたということが、当代の座

主、義演准三后の日記に書かれているそうである。太閤さんはどんなに心残りであったことだろう。秀吉なきのち、三宝院を完成したのはこの義演であるという。この院には通用門のほか、勅使門としての唐門があり、漆や金箔はすっかり剥げおちているが、桐と菊の浮き彫りは桃山時代の文化をしのばせてくれる。

三宝院を出てまっすぐに坂道をのぼってゆくと、朱塗りの西大門がみえる。これも五大力さんの旗でいっぱいである。西大門もやはり焼失したが、秀頼が紀州の寺から移築したもので、おおきな門である。ここに安置されている仁王像はもと南大門にあったのを修理したものだという。門をはいってしばらく木のしげる坂道をゆくと金堂につく。このまえのひろい庭があすのお祭りの中心会場であるらしい。中央に舞台を組み、大きな鏡餅がすえられている。金堂にも舞台にも五色の旗がはりめぐらされ、吹き流しがひるがえり、それは華やかなけしきである。この金堂も慶長五年に秀頼が紀州から解体移築したもので、平安後期の建物だという。なかには薬師如来、日光、月光阿菩薩、四天王がおられる。五大堂は山の上にあるが、とおいので下の金堂でお祭りがおこなわれているらしい。

このときの力競べについては、あとで新聞をみたら、鏡餅は、男性が百五十キロ、女性が九十キロあるもので、これを特別の三方にのせて持ちあげ、耐久時間をきそうのだそうである。女性は上京区の主婦で四十七歳のひとが三分十三秒で優勝、挑戦九年目の悲願というからたいへんである。男性は奈良の四十三歳のひとで、二分三十秒で横綱だそうである。力ばかりでなく、タイミングと心の持ちかたの勝負だというが、そういうものかもしれない。

金堂とは道をはきんで西がわに、下醍醐でただひとつ焼失をまぬがれた五重の塔がそびえる。京都府下最古の木造建築物だそうである。とにかくすごい。各層の屋根のひさしの木組はただもう感嘆するばかりである。モザイクのように精巧にくみだてられた木組、どのひとつにもこの塔をささえうる力がひとしく配分されているような手足の指の先までエネルギーの浸透しているような、なんと形容すればよいのだろうか、なにひとつ無駄のない一体感がある。堂々として目のまえに立つもの、この塔をこれほどがっしりと築きあげたひとは、どんな人なのだろうか。朱雀天皇の承平六年(五三六)に起工、村上天皇の天曆五年(五五二)に完成したそうだから十五年かかっている。ひとびとの仕事のようなすを想像しながら塔を見上げてみると、心が熱くなるような気がする。これほどの働きをまえにしては、ただおみごとの拍手をおくることのなんと軽々しいわざであることか。

この塔は、奈良朝までの仏舍利をまつるものとは意味がちがいがい、真言密教の法身大日如来の象徴としてあらわされたもので、万象は、地、水、火、風、空から生じること、表示しているのだそうである。初層内部には両界曼荼羅の壁画があるという。

わたしたちは上醍醐へはゆかず、塔のすこしうえにある伝法学院のあたりから引き返した。上へのぼるにはそうとうな足ごしらえと時間がひつようなようであるし、もう四時を過ぎていて、とても無理である。

それにしても醍醐はにぎやかであった。堂々と誇りたかい寺であるが、民衆の信仰をひきつけて、時の権力とむすび、つよく生き抜いてきたたくましさがある。げんさいも聖宝から継承されている修験道がつづいており、三宝院門跡当山派といわれる。六月七日に花供入峰の祭りがおこなわれ、奈良の大峰山に修行に入る山伏が毎年五百人ちかいということである。

「花はその寺の性格を表す。醍醐寺は桜、随心院は紅梅、勤修寺は水蓮」と常遍師がいつておられることは、やはりそのとおりだろうと思う。

「五百人ちかいということである。」

「花はその寺の性格を表す。醍醐寺は桜、随心院は紅梅、勧修寺は水蓮」と常遍師がいつておられることは、やはりそのとおりだろうと思う。

家にかえりついたので五時半ごろであった。四時間あまりでこれだけ廻ってこられるのだから、自動車はやはり便利なものである。勧修寺で、長男が撮ってくれたわたしたちの写真を現像してもらったら、ひさしぶりに太陽のもとに出てきたクマさんのように、まぶしそうに目をほそめてぼうっと並んでいた。「専門家のくせにもうちよとなにか工夫がないのかなあ」などと父親はほやいていたが、なかなか、息子でなければ撮れないような親の風景だとおもって、わたしは気にいっている。

今日 日 こ そ 好 機

—法華經巡礼28—

1980.3.17.

原 田 憲 雄

2-15. さて世尊は、その意味をより一層広大に示そうとして、そのときこの偈を述べた——

そのとき思ひ上がって信仰のないピク、ピク尼、

男の信者、女の信者は、五千人より少なくなかった。(38)

おのれの欠陥は知りながら、学業も未熟なままで、

多くの傷をおし隠し、出ていった、おろかな智者は。(39)

かれらは会衆のカスだとみとめ、世間の主はかれらをそのまま見過ごした。

この法を聞いたところで、かれらにとっては適當でない。(40)

さっぱりし、粉殻がなくなつて、わたしの集会はおちついた。

枝葉はすべて除かれて、核だけ樹立した。(41)

聞きなきい、シャーリプトラよ、いかにして最高の人が法を覺り、

いかにして導師の仏が物語るかを、幾百という多くの巧みな方便で。(42)

また仏たちが、幾千万の衆生らの種々の行動や意向を知り、

さまざまの行為、かれらが過去になした善事を知っているのを。(43)

いろいろの説明や理由を述べ、これらの衆生を証得させ、

幾百の原因や実例しめし、わたしもまた、あらゆる衆生をそれぞれに満足させる。(44)

もろもろの経をわたしは説き、おなじく偈頌や本事譚、本生譚、また奇瑞譚、

因縁譚や幾百の種々の譬喩、重頌や論議をわたしは説く。(45)

つまらぬものを棄しがり、無知で、幾千万の多くの仏のもとで修行せず、

輪廻には執着し、おおいに苦しむ者たちに、涅槃をわたしは示すのだ。(46)

この方便を、自存者のわたしは、仏知を覺らせるために使いはするけれど、

しかしかれらに語らない、きみたちもこの世で仏になるだろうとは。(47)

なぜなら、保護者は、時期を観察し、好機を見てとり、そこではじめて語るのだ。

今日こそ好機がやってきた。だからわたしは今ここで、決定的な真実を説く。(48)

atha khalu bhagavān etam evārtham bhūyasā mātrayā sandarśayamānas tasyām velāyām imā gāthā
abhāsata ||

athabhimāna-prāptā ye bhikṣu bhikṣuṇy-upāsakāḥ /

upāsikāś ca aśrāddhāḥ sahasrāḥ pañca nūnakāḥ ||38||

sampaśyanta imam doṣam chidra-sikṣā-samanvitāḥ /

vraṇāpś ca parirakṣantāḥ prakrāntā bāla-buddhayaḥ ||39||

parvatkasatu tāñ jātvā lokanātho 'sni dhvamsi tāñ /
 tat tesāñ kuśalañ nāsti śravyur dharmā ye imāñ // 43//
 śuddhā ca nispalāvā ca susthitā pariśan mama /
 phalgu vyapagatā sarvā sarā ceyañ pratiśhitā // 41//
 śrūhi me śārisutā yathaisa sambuddha dharmāñ pursettamehi /
 yathā ca buddhā kathayanti nāyakā upāyakuśalya-śatair anekaiḥ // 42//
 yathāsayañ jāniya te carim ca nānādhimuktāñ iha prāñi-koṭināñ /
 citrāñi karmāñi viditva tesāñ purākṛtañ yat kuśalañ ca tehi // 43//
 nānā niruktīhi ca kāraṇehi samprāpayāmi ima teśa prāñināñ /
 hetuḥi dr̥stānta-śatehi cāhañ tathā tathā teśayi sarva-sattvāñ // 44//
 sūtrāñi bhāsāmi tathaiva gāthā itivṛttakañ jātakāñ abhūtañ ca/
 nidāna aupama-śatais ca citṛair geyañ ca bhāsāmi tathopadeśāñ // 45//
 ye dhonti hinābhiratā avidvasū acīṛṇa-caryā bahu-buddha-koṭisu /
 saṃsāra-lagnās ca sudḥkhitās ca nirvāṇa teśāñ upadarśayāmi // 46//
 upāyañ etañ kurute svayambhūr bauddhasya jāñasya prabodhanāṛthāñ /
 na cāpi tesāñ pravade kadācid yusme pi buddhā iha loke bhesyatha // 47//
 kiñ kāraṇāñ kālañ areksya tāyī kṣaṇāñ ca dr̥ṣṭva na tu paśca bhāsate /
 so 'yañ kṣaṇo adya kathānci labdho vadāmi yencha ca bhūta-niścayāñ // 48//